

全国大会原稿見本

岩手県の観光発展過程と観光地形成

The Process of Development on Tourism and the Formation in Iwate Prefecture
as a Tourist Destination

鈴木 善吉*

SUZUKI Zenkkichi

岩手県の観光地としての発展過程を、県内の各市町村別にとらえてみることで観光レクリエーション施設を通して分析することで、把握するのが本研究の目的である。岩手県の観光地としての発展過程を、県内の各市町村別にとらえてみることで観光レクリエーション施設を通して分析することで、把握するのが本研究の目的である。岩手県の観光地としての発展過程を、県内の各市町村別にとらえてみることで観光レクリエーション施設を通して分析することで、把握するのが本研究の目的である。岩手県の観光地としての発展過程を、把握するのが本研究の目的である。

キーワード：観光発展過程、観光地形成、温泉地、農村観光

1. はじめに

地域や地域における産業の発展過程の研究は、現状の地域や産業を理解し、将来への展望を考察するうえで重要である。そのために、これまでに地域あるいは地域の産業が外部環境の変化にいかに対応してきたか、その変化に独自に内発的発展をどのように進めてきたのか、あるいは外部民間企業が地域に進出してきたときに、いかに対処してきたのか、そのような過程を評価、分析することで、今後の地域の発展のあるべき方向への示唆が得られるのである。

地場産業の発展過程の研究は、現状の地域や産業を理解し、将来への展望を考察するうえで重要である。そのために、これまでに地域あるいは地域の産業が外部環境の変化にいかに対応してきたか、その変化に独自に内発的発展をどのように進めてきたのか、あるいは外部民間企業が地域に進出してきたときに、いかに対処してきたのか、そのような過程を評価、分析することで、今後の地域の発展のあるべき方向への示唆が得られるのである。

地域や地域における産業の発展過程の研究は、現状の地域や産業を理解し、将来への展望を考察するうえで重要である。地域や地域における産業の発展過程の研究は、現状の地域や産業を理解し、将来への展望を考察するうえで重要である。

すなわち、本研究においては、まず1988年以前に温泉地の形成に影響を与えた要因について分析し、1988年以降については、これまで観光とは縁の薄かった農村地域において観光事業が活発になった背景を調べることにしている。岩手県の観光地としての発展過程を、県内の各市町村別にとらえてみることで観光レクリエーション施設を通して分析することで、岩手県の観光地化の全貌を把握するのが本研究の目的である。

2. 岩手県の地域特性

(1) 岩手県の概要

岩手県は本州北東部に位置し、面積は1万5,278k m²で北海道につぐ広さである。中山間地域⁽¹⁾が多い。人口は2002年9月現在、約141万人である。1995年の国勢調査による産業別人口比率は、第1次産業が16.0%、第2次産業28.6%、第3次産業が55.4%となっている。年間の入込み客数は2001年度で3,920万人である¹⁾。

表の場合には、上に「表—1 タイトル」をいれる。図や写真の場合は、下に「図—1 タイトル」又は「写真—1 タイトル」といれる。ゴシック太字。ポイント数は図・表などのバランスを考えて執筆者が選択する。

図—1 岩手県の位置

*岩手産業大学地域社会学部

を目的とした理想に近づけることと、外部のたくみが進出するにつれ、デザインの統一が見られなくなっていることがあげられる。

(3) 猿ヶ京の旅館の盛衰

すでに見てきたように、三国温泉郷の5温泉地においては、猿ヶ京を除いた4温泉地は旅館の変動はない。ここでは、外部の変化にもっとも敏感に変動した猿ヶ京温泉における旅館の盛衰を分析することにする。

表-3は現存する旅館の創業年であるが、一見して、赤谷湖が誕生して猿ヶ京温泉が全盛期を迎えた1962年から68年の間に9軒、経営者が交替した旅館も含めれば11軒が開業している。しかもこの時期の旅館は、猿ヶ京のなかでは比較的規模が大きい20室を越える旅館であった。次の開業ブームは上越新幹線と関越高速道が開通した1986年から97年の間である。この時期も新規に9軒、経営者が交替した旅館が3軒であった。しかし、この時期の旅館は民宿や食堂から転換・兼業と、規模は10室未満と小さい。

次に、旅館を廃業ないしは経営者が交替した旅館をみたのが表-4である。20室以上の規模の旅館の倒産ないしは後継者がいないために廃業、あるいは経営不振からの経営者の交替が生じた。以上のように、猿ヶ京温泉の旅館は、外部環境の変化に栄枯盛衰をみせているのである。

5. まとめ

国道17号線の谷間沿いに発展していた新治村の観光が、1990年頃から、高台の農業地域にも展開され、現在では、ほぼ全域に観光地化が進行している。

時間の流れからみると、それまで湯治場的雰囲気であった猿ヶ京の温泉地が、1955年から1961年にかけて大きく変貌した。1958年、相俣ダム建設に伴う赤谷湖の出現と、旅館が移転・新築をして猿ヶ京温泉となったこと、1959年の三国トンネルの開通と1961年の苗場スキー場の開場により、猿ヶ京地区への影響は大きく、猿ヶ京温泉は歓楽的傾向を強めた。同時に、猿ヶ京地区には苗場スキー場を利用する客の宿泊施設として多数の民宿が開業した。特に体育民宿村は全国的にも話題を呼ぶものであった。猿ヶ京地区は、1975年のオイルショックまで繁栄を続けた。

その後は、静かな時期が続いたが、次の大きな変革は、1980年代の後半であった。1982年の上越新幹線の開通を皮切りに、1985年の関越高速道の全通、1989年

の総合保養地域整備法の重点整備地区の指定、さらには1986年から1990年にかけて整備が始まった「たくみの里」である。高速交通機関の整備に伴う恩恵は、東京圏への接近を容易にし、「たくみの里」、果樹園など農村地域への観光の波及をもたらすこととなった。しかし猿ヶ京温泉においては、団体旅行から個人・グループへの旅行の変化、大都市地域の旅行者を受け入れる旅館として、対応できなくなった旅館と、むしろそうした変化に対応した旅館と明暗をわけることになった。

湯宿はかつては新治村の商業、観光の中心地であったが、いまは静かな保養型の温泉地となっている。山中の一軒宿の法師温泉、川古温泉は、湯治の伝統を守りつつも、自然環境を生かして、保養目的のあたらしい都会の人たちに対応している。新治村の観光は、全国の観光地間競争のなかで、新たな旅行者の変化への対応を模索しながら、つぎの時代へと進むのである。

謝辞：本研究をまとめるにあたり、観光情報センター研究員田中忠男氏にたいへんお世話になった。お礼を申し上げる。

【補注】

- (1) 中山間地域とは中間農業地域と山間農業地域を合わせた名称である。
- (2) 1997年2月、村のリポート「三国街道『たくみの里を歩く』」が「第3回毎日地方自治賞」の最優秀賞を受賞した。
- (3) 湯本ホテル社長、岡島二郎氏談

【参考文献】

- 1) 山田耕次 (1975) : 秋田観光開発史、今古書院
- 2) Colton, Craig W. (1987) : Leisure, Recreation, Tourism A Symbolic Interactinism View, *Annals of Tourism Research*, Vol. 14, pp. 345-360
- 3) 有末武夫 (1985) : 上州新治村の地誌—1980年代後半の課題、群馬大学地理学会論文集、13、pp. 54-73
- 4) 溝尾良隆 (1996) : 群馬県新治村におけるリゾート開発計画とリゾート地域の形成過程、*経済地理年報*、42(3)、pp. 18-32
- 5) 小谷達男 (1974) : 観光と地域開発 (鈴木忠義編「現代観光論」、有斐閣)、pp. 209-212、p. 215
- 6) 溝尾 (1996) : p. 20
- 7) Smith, Stephen L. J. (1989) : *Tourism Analysis*, Longman Scientific & Technical, p. 312